

**主 題：主の晩餐②**

**聖書箇所：コリント人への手紙第一 11章25-34節**

コリント教会の集まりがその人々にとって益とならずに害となっていた。教会として彼らが集まる時、その集まりは主の栄光を現すこともなく、また兄弟姉妹たちの信仰の強化にもなっていなかった。

**A. 愛餐でない愛餐 17-22節**

またそれだけではなく、この群れの中には一致はなく分裂が存在していた。貧しい者たちとそうでない人々が本来ならば助け合い、キリストの愛を実践するところが、そのようなことが全くなされていなかった。また非常に悲しいことに、いつの間にか彼らが集まった時に主を覚えることよりも飲食がその目的となってしまっていた。主の栄光を現すべき教会が、まさにこの世の社交場と同じような状態になり世俗化してしまっていた。大変悲しいコリント教会が抱えるさまざまな問題をパウロは熟知していました。彼らのさまざまな問題についてパウロはみことばから真理を教えていきます。

**B. 聖餐式の意義 23-25節**

**1. 聖餐式についての説明 23-25節**

前回私たちが見始めたように、パウロは彼らに「主の晩餐」について教えています。この教えを彼らが知らなかったわけではありません。パウロは改めてこの教えを彼らに与えるのです。10:21ではこの「主の晩餐」のことを「主の食卓」と呼んでいました。この「主の晩餐」というのは一体何かというと、イエス様が弟子たちとお持ちになった最後の晩餐の時に、主ご自身が守るようにと弟子たちに命じられた聖餐式の話です。あの二階座敷でイエス様が弟子たちとお持ちになった最後の晩餐、過ぎ越しの食事が最初の聖餐式になるのです。神様は教会に二つのことを命じられました。一つは主イエス・キリストを信じた者たちはバプテスマを受けるようにということでした。二つ目は主の聖餐を守るようにと。前回、初代教会において、人々が「主の晩餐」に集まった時、そこには愛餐が伴ったということをお話ししました。愛餐があつてその後、彼らは聖餐式を行っていたのです。最初にお話ししたように、パウロからこのことを学んでいたコリント教会ですが、パウロはいま一度彼らに「主の晩餐」とは一体何なのか、教会とは一体何なのかについて教える必要が出てきました。

主の真理にしっかりと立つということは、あなたや私にとっても、どの時代でも、どの場所においてもすべての信仰者にとって大切なことです。なぜかということ、我々がしっかりと真理の上に立つことによって、教会の中に入り込んでくるさまざまな偽りの教えを見分けて排除することができるからです。そういった悪の働きというのは常になされているので我々は賢くならなければいけない。何が神の教えなのか、何がそうでないのかを見極めることが必要です。同時に我々が神様の真理の上にしっかりと立つならば、主の目的をこの世においてしっかりと果たすことができるのです。私たちは主の栄光を現すために救われ、主の栄光を現すために生かされている。その働きをなすためには、我々が神の真理の上にしっかりと立ち続けていくことが必要です。

**1) パンについての説明 23-24節 ルカ22:7-8**

さて前回から学び始めたこの「主の晩餐」、今からもう一度その晩餐に時を戻してみましよう、あたかも私たちがその場にいるかのように。皆さんの頭の中に描いていただきたいのは、エルサレムでイエス様が弟子たちと過ぎ越しの食事をしておられる光景です。実際にその場にあつて、パンを取り弟子たちに配る前に、本来ならばホストはイスラエルがエジプトでの奴隷から解放されて約束の地へと導かれたことを話すはずなのです。必ずそのようにしたのです。ところがイエス様はその話をなさらずに、弟子たちにとって大変驚きのメッセージをなさったのです。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行ないなさい。」と11:24です。イエス様はパンを取って弟子たちに配ろうとする時に、このパンは「わたしのからだ」なのだと言われた。パンは主イエス・キリストのからだを象徴したのです。そのパンがイエス様のからだになったわけではありません。あくまで象徴です。つまり主はこの夕食の後、翌日十字架の上で成し遂げられる完全な贖いについて、罪の赦しについてお話になったのです。この最後の晩餐の翌日にイエス・キリストは十字架につけられるのです。

ですから、24節の中に「これはあなたがたのための、わたしのからだです。」とあります。先ほどもお話ししたように、このパンはイエス様のみからだを象徴していた。ここでイエス様は、明日私はあなた方の身代わりとなって十字架に架かることをお話になるのです。ここであえて「あなたがたのため」と説明されています。イエス様の十字架の死の目的が明確に記されているのです。イエス・キリストはご自分の罪によって十字架にはりつけにされるのではなかったということです。イエス様は「あなたがたの

ため」に、あなたや私のために十字架にお架かりになった。そのことを強調するのです。この十字架は、私の身代わりの死は「あなたがたのため」だと。主イエス・キリストはご自身のからだを「あなたがたのため」に犠牲にして、救いを備えてくださった。その贖いのことをイエス様がここで話しになったのです。このパンは主イエス・キリストのみからだの象徴なのだ。

## 2) 杯についての説明 25節

その話をされた後イエス様は、弟子たちとともに食事をなさいます。パンを配った後、人々は過ぎ越しの食事を行うのです。さて、その食事も終わり、いつものようにイエス様は杯を取ってそれを弟子たちに配ります。その前にイエス様はお話をされます。これはもういつも同じことです。何か特別なことをされたのではない。いつもと同じようにイエス様は杯を配る前にお話をなさった。本来ならばそこではエジプトで流された小羊の血の話をするのです。こうして私たちは神のさばきに遭わずにそのさばきから過ぎ越された、救われた話をするのです。ところがイエス様がこの時にお話になったのは、その話ではなく、翌日なされるご自身の犠牲の話だったのです。25節「この杯は、わたしの血による新しい契約です。これを飲むたびに、わたしを覚えて、これを行ないなさい。」、イエス様はこの後何が起こるのかちゃんとご存じでした。神ご自身が人となり、神ご自身があなたや私のためにご自分のいのちを犠牲にしてください。「わたしの血による新しい契約」なのだ。これがこの最後の晩餐において主がなされた教えでした。

皆さんに今注目いただきたいのは、「この杯は、わたしの血による新しい契約」とイエス様が言われたところです。「新しい契約」と言う以上古い契約が存在します。「契約」とは一体何なのかというと、聖書から見るならば、その意味は相互の利益と責任が含まれる重大な同意であるとあります。何かを同意して何かを決めるのですから、そこには双方の利益と責任が含まれるのです。そのことを我々はこの「契約」という言葉を使う時に覚えておかなければいけない。「新しい契約」を結んだならば、そこには責任が伴うということです。

### ⇒「古い契約」 出エジプト24：1-8

さて、まずこの古い契約というのは人間が主なる神様と結んだ契約のことです。出エジプト24章にそのことが出てきます。5節に「それから、彼はイスラエル人の若者たちを遣わしたので、彼らは全焼のいけにえをささげ、また、和解のいけにえとして雄牛を主にささげた。モーセはその血の半分を取って、鉢に入れ、残りの半分を祭壇に注ぎかけた。」と記されています。和解のいけにえの雄牛の血の半分を祭壇に注ぎかけ、まだ半分残っているのです。7-8節「そして、契約の書を取り、民に読んで聞かせた。すると、彼らは言った。『主の仰せられたことはみな行ない、聞き従います。』」そこで、モーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った。『見よ。これは、これらすべてのことばに関して、主があなたがたと結ばれる契約の血である。』」と。私たちはあなたがたと言われることを守り行いますと契約を結んだのです。

### ⇒「新しい契約」との違い エペソ1：7 Iペテロ1：18-19

では「新しい契約」というと、神様が人間と結んでくださった契約です。少し比較して見ていきます。古い契約は和解のいけにえの血を取って、その半分は祭壇に、半分はそれを誓った民に注ぎかけられる、動物の血によって結ばれたものでした。「新しい契約」というのは動物の血ではありません。主イエス・キリストの血潮によって結ばれた契約です。ですから25節に「この杯は、わたしの血による新しい契約」だとあります。この「新しい契約」はわたしの血によって成立するものであると。

古い契約と「新しい契約」の違いの二つ目は、古い契約は自分の努力や行いを強調するのです。先ほど読んだところにある、これが神が要求されていることだと聞いた時に、人々は「わかりました。それを守ります」と言うのです。彼らは自分たちの努力でもって、自分たちの頑張りでもって神が要求していることを守ると誓うのです。これが古い契約で強調されています。「新しい契約」は自分の努力や行いを強調するのではなくて、主イエス・キリストの恵みを強調するのです。エペソ1：7に、「この方にあって私たちは」、つまりイエス様にあって私たちは、「その血による贖い」、イエス様の血潮による贖い、「罪の赦しを受けています。」、我々はイエス様の血潮によって罪の赦しをいただいた、「これは神の豊かな恵みによることです。」と教えます。ですから私たちの努力によってこの罪の赦しをいただいたのではないということです。神様が一方的な恵みによってそれを私たちに与えてくださった。

三つ目の比較は、古い契約は救いをもたらすものではなく、「新しい契約」は救いをもたらすものです。ペテロはIペテロ1：18で「ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは（つまり救いの話です）、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」とあります。「新しい契約」は罪の赦しを与えてくれるものだ。

最後にもう一つだけ、古い契約はモーセを通して与えられ、「新しい契約」は主イエス・キリストによって与えられています。

まとめるとこういうことです。イスラエルの民は神のメッセージを聞いた時にそれを守ると約束したのです。彼らは主の教え、主の仰せを厳守することを約束はするのです。でも守れなかった。神の要求を順守することをどんなに心で強く決心しようと、そのために最善を試みても、私たちにできることはありません。人間はどんなに努力しようと、自分の努力によって救いにあずかることは絶対に絶対にあり得ない。そのことに気づくために古い契約は存在したのです。なぜならこの古い契約というのは、まさに自分の努力による救いでした。ここに言われていることを実践すれば救いが与えられると。もう皆さんご存じのように、私たちは自分の努力で罪の赦し、救いを得ることは絶対にありません。だから神の助けが必要なのです。神の救いが必要なのです。そしてあの十字架での身代わりの死によってイエス様は完全な救いを備えてくださった。その救いは恵みによって与えられるものであり、そのことを「新しい契約」だと言われるのです。

残念なことに私たちは自分の努力で自分の救いを得ることができると信じ切っているのです。私たちが気づかなければいけないことは、私たちにはその可能性はゼロだということです。それに気づかない限り、神の備えてくださった救いを求めて出て行こうとはしない。だから一生懸命自分で守るようにやってみなさい、自分の行いで神様に受け入れていただけるように頑張ってみなさいと。誰も行いによって救いを得ることはない、本来はその時に気づくはずなのです。

イエス様はきょうのテキストの中で、「この杯は、わたしの血による新しい契約」だと言われました。救いにあずかったあなたは神様とこの「新しい契約」の関係にあるのです。イエス様を信じた人々に神様がどんな祝福を下されたのか——。ヨハネ 1 : 12 に「その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」とあります。イエス様を信じたあなたは神の子どもとされた。ではこの世界をお造りになり、我々を愛してくださり、この救いを備えてくださった神様が私たちにとってどんな存在なのか——。「この方は私の主であり、この方は私の神だ」とトマスが口にしたように、このような特別な関係の中に我々信仰者は入れられたのです。この世界のすべてをお造りになり、すべてを治めておられる方、しかも我々のような罪人を愛して、そんな私たちのために救い主を送ってくださった方が私の神なのです。しかも私はこの方の子どもとされたのです。この救いによって、このような特別な関係に私たちは入れられたのです。

## 2. 聖餐式についての命令：「覚えて行いなさい」 24、25節

### 1) 「覚えて」

それを話した後、もう一度24、25節を見ると、24節「わたしを覚えて、これを行いなさい。」、25節にも「わたしを覚えて、これを行いなさい。」と同じことばが繰り返されています。「覚えて」という名詞は「私を愛情をこめて記念するために」という意味があります。この「覚え」ということばは、ただ何となく出来事を思い出すという話ではないのです。確かイエス様って十字架で亡くなったんだね、そういうことを思い出すと言っているのではないのです。ここで言われているのは、十字架に架かっておられる主とあなたとの可能な限り生きた親しい交わりの話です。誰かがこんなことを言いました。あなたの見ておられる十字架のイエス様は今も血を流しているかと。私たちはイエス様の十字架をただ過去の出来事として片づけるのではないのです。我々がイエス様の十字架を見上げる時、そこで私の身代わりとなって苦しんでおられる主を見るのです。人であられたゆえに、からだじゅうから血があふれ出て、苦痛にあえぎながらその痛みをすべて飲み干してくださった。なぜ主がこんな苦しみを味わったのか——。あなたのためだと。私たちは歴史上の事実としてただ覚えるだけではない。十字架に架かってくださり、いのちを捨ててくださったこの尊い犠牲があって、私はこのすばらしい神様と特別な関係に入れられた、イエス様の味わわれたすべてのものは私のためだったと。

私たちも愛する人を天に送って、時に懐かしむことがあります。もちろん同じレベルの話ではありませんが、少しわかっていただけだと思います。いろいろなことを思い出しながら、こういう教えを受けたとか、こういうことを一緒にしたとか、それを考えるだけで私たちは感動を覚えたりします。涙が出て感激したりします。イエス様と私たちの関係というのは生きたものであるべきなのです。いつも私たちはあの主の十字架を覚えて、苦しまれたすべてのことは私を愛するためだったと忘れてはいけない。

### 2) 「行いなさい」

そしてここに「行いなさい」という動詞がついています。これは現在形の命令です。イエス様がなしてくださったことを私たちはいつも思い続けるのです。教会によって毎週持つところ、月に1回持つところ、いろいろな形で聖餐式を持っています。みことばが私たちに教えるのは、この聖餐式を継続して行い続けていきなさいということです。何回持つべきということは聖書の中に教えられていない。毎週持つからすばらしい信仰者が誕生して、月に1回だから、2カ月に1回だからそうでないのか、そうではありませんよね。このみことばが私たちに教えているのは、あなたはいつもあの十字架のイエス様を

覚えて、主といつも親しい交わりにいなさいということです。聖餐式をとる時だけではないのです。我々はいつもこの主を思いながら、心からの感謝と礼拝を捧げ続けていくと。

### C. 聖餐式の目的 26節

イエス様がこのお話をなさったのですが、最後の晩餐のこの時までの過ぎ越しというのは、先ほどもお話したように、彼らがエジプトからの解放を覚えて感謝を捧げたのです。でもイエス様が聖餐式を教えられたこの時から、私たちはこの主を感謝する者へと変えられるのです。私たちがイエス様を覚えて集まる時、この聖餐式の日に何をしているかということ、イエス様の犠牲によって罪の奴隷から解放されたこと、永遠の呪いから解放されたこと、永遠の滅びから解放されたことを覚えて主に対する感謝です。私たちが主を見上げる時に、わたしは喜んであなたのために犠牲を払った、とすれば、主があなたや私に問われているのは、ではあなたは私のためにどんな犠牲を払うのか——。私たちは時間にしても、自分たちが与えられている物にしても有り余っている中から主にお返ししていませんか？主は神でありながら人としてこの世に来てくださり、ご自分のいのちをあなたのために犠牲としてくださった。問われているのは、ではあなたはそれに対してどんな犠牲を払って主に感謝を表すのかということです。

#### 1. 世に対する責任を果たすこと 26節

26節を見ていただくと「ですから」と続きます。「あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲むたびに」、あなたたちがこの聖餐式を行うたびに、このすばらしい主の犠牲を思うたびに「主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのです。」とあります。覚えていますか？「新しい契約」には責任が含まれています。確かに神様は一方的な恵みによってあなたや私に救いを下さった。それが終わりではないということです。私たちには責任があるということをしかり心に刻んでおくことが必要です。どんな責任かということ、「主の死を告げ知らせる」のだと書かれています。イエス様の十字架を人々に伝えるのだと。私たちが伝えるメッセージはあのイエス・キリストの十字架によってどんな罪人でもその罪を完全に永遠に赦していただけるのだ、このイエスにあって救いはあるのだ、このイエス・キリストこそが私たちを罪から救い出してくださる唯一まことの救い主なのだということです。

私たちの周りにはこの救いを拒んでいる人がいっぱいいます。救いの話を聞いても聞いてもそのメッセージを拒み続けている者たちが山ほどいます。パウロは「主が来られるまで、主の死を告げ知らせ」ていきなさいと教えるのです。主が来られるまで、再臨のその時まで、イエス様があなたを迎えに来てくださるその時まで、もしくは再臨の前に肉体の死を経験するかもしれない。パウロが言うのは死であろうと、再臨であろうと、あなたが地上に置かれている間は、この十字架での身代わりの死によって救いを備えてくださった主を、そして主によって備えられた完全な救いを宣べ伝え続けていきなさいと。それがあなたや私に託された責任なのです。そんな責任を神は私たちに与えてくださった。

私が今でも思い出すのは、小学校の朝のホームルームに、それぞれが学校に来るまでの間に新聞やラジオ、テレビを通してニュースを調べてきて、それをみんなの前で発表するという時間がありました。その当時はインターネットなんかありませんから、新聞を読んだり、テレビを見たり、ラジオを聞いたりして、できるだけみんなが知らないニュースを持ってきて発表しようと、みんな必死になってニュースを探っていました。何か見つけた時は勇んで学校にやって来て、その時間を楽しみにして、先生が来るのを待っていて、先生がその機会をオープンした時に我先にと手を挙げて、こんなことがありました、知ってますか、皆さん？と。私たちはこの世界の人々にとって最も素晴らしい知らせを知っているのです。罪の赦しは与えられるのです。救いは完成したのです。救いは備えられたのです。それを私たちは人々の前で喜んで伝えよう、我先にそのメッセージを伝えようと、そんな思いを持って与えられた責任をとらえているのでしょうか？私たちはこういう責任を主からいただいている。ですから聖餐の式にあずかる時、イエス様の十字架を覚える時には、イエス様にお会いするその日までしっかりとその務めを果たし続けていきなさいとパウロは教えるのです。

#### 2. 主に対する責任を果たすこと 27-32節

##### 1) 主に対してふさわしくあること 27節

27節に「したがって」ということばが出てきます。つまりあなたたちはこういう責任を負っているから、「もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば」と続いています。この「ふさわしくないまま」というのは不適當な状態、それらの価値と一致しないという意味です。もし私たちが正しくない態度をもってこの聖餐式に着いているならばということです。もしあなたが正しくない状態で、正しくない心の態度をもって聖餐式の席に着いていて、パンを、そして杯を取ろうとしているのであれば、あなたは覚えておかなければいけない。27節「主のからだに血に対して罪を犯すこととなります」とあります。あなたがやっていることは主に対する罪であり、あなたは主に対して罪を犯すことになるのだと、大変厳しいことをパウロは言います。

よく考えてみたら、ちゃんと聖餐式に出てきて静かに座っていて、回ってくるパンと杯をいただいている。どこが悪いの？と言うかもしれない。でもこの後パウロが私たちに教えてくれるのは、神様がご覧になっておられるのはあなたの心だということです。レジメの中にマラキ書のみことばを2カ所記しておきました。マラキ1：6「『子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。』と。あなたは確かにそう言うかもしれない。でもあなたの態度はどうかと。マラキ2：2にも「もし、あなたがたが聞き入れず、もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら、——万軍の主は仰せられる。——わたしは、あなたがたの中にのろいを送り、あなたがたへの祝福をのろいに変える。」と。罪の問題というのはどちらでもいい話ではありません。大変重たい話です。神はどんな罪であってもそれを憎んでおられる。ですから私たちは確かにそういうことをしていたとしても問題なのは、どんな心でしているのか、本当に主に対する尊敬を持ってしているのか、本当に主に対する恐れを持ってしているのか——。そこが神の関心だと言うのです。

### ◎「ふさわしくない状態」とは？

ですから少し考える必要があります。私たちは今ここで聖餐式のことを見ているのですが、私たちが何かをする、この態度はどんなことをするにも共通しています。「ふさわしくないまま」で私たちが聖餐式にあずかるとか、「ふさわしくないまま」の態度で例えば礼拝に集うとか、集会に集まるとか、この「ふさわしくないまま」の状態とは一体どういう状態なのか——。幾つか挙げることができます。

#### ① 罪を持ったままの状態

つまり神の前に罪を告白しないで、罪を隠した状態が出て来るということです。思い出してください、聖餐式というのはイエス様のあの身代わりの死を覚えるのです。イエス様がご自分のいのちをもって備えてくださった完全な救いを思い出すのです。ですからそこにあずかっているひとりひとり信仰者は、主よ、あなたが備えてくださった、あなたがこんな大きな犠牲をもって備えてくださった罪の赦しを感謝しますと、本来ならそのように言いながらこの聖餐の式にあずかるのでしょうか？確かに口ではそう言いながら、心の中に主が憎まれ、また主を十字架に架けた罪を愛しているとすれば、その人は偽善者ではありませんか？口では感謝すると言いながら心の中に神が憎んでおられる罪があり、その罪を愛していると。言っていることとしていることが違うのです。栄光ある聖い神様の前に罪を持ったまま来るというのは、神を恐れていないことの証拠です。神に対する畏敬の念に欠けているのです。そういう人は神の前にふさわしくないと。ですから、我々は吟味しなければいけない。主の前に立つ時にあなたは見事に自分の罪を隠しおせたとおっしゃるかもしれない。でも神の前ではすべては裸なのです。神様はあなたの心をご覧になっておられる。感謝なことに我々が神の前に罪を告白するならば、つまりそれは神様と神の言われることに同意しているのです。誰かのせいとか、誰かに責任転嫁するのではない。私がしたのです。私が間違った、神と同意することです。その時に神は赦して下さる。そして私たちは神の前に出て行くのです。それがふさわしい態度です。

#### ② 形式的に守っている状態

聖餐式でも礼拝でも皆さんがなぜこうして集まって来るのか——。私はこういうふうにクリスチャン生活を送っているから、こんなふうを送ってきたから、こんなふうになんか言われたから。あくまで形式上だけのものだとすれば、あなたのからだはここにあっても、あなたの心はここにありません。そのような態度が神の前にふさわしいかどうかです。

#### ③ 目的を間違えている状態：神様から何かをいただくために来る

もう一つ挙げるとしたら、例えば聖餐式や礼拝に集まってくる、何でもいいのですが、その時にそれに参加することによって神様から何かいただけると期待することです。それもふさわしくない。例えば私たちがこうして礼拝に集まってくるのは、神様から与えられたものをしっかりと覚えてそれを感謝するために来ているのです。神に礼拝を捧げるために来ているのです。ここに来たら何をもらえるのでしょうか？もちろん神様のみことばが教えるみこころを我々は知ることになっています。でも私たちが礼拝に集まる時、私たちは神への感謝を持って集まって来るのです。イエス様の十字架を覚えた時に何が必要なのか——。では聖餐式につけば神様が何か特別なご褒美を与えてくれるのだろうか——。聖餐式にずっと出ていたら、皆勤賞を取れば、何か特別な祝福があるのかと。それはしなければいけないことではないのです。私たちにあってほしいことなのです。だから私たちは集まって来るのです。忘れてはならないのは何かを得るためではないのです。得たことに対する感謝なのです。主のなしてくださったみわざに対して私たちは心からそれを感謝して、神に正しく応答しているのです。

ですからパウロは、我々クリスチャンがこの聖餐式に望む時、イエス様の十字架を覚える時に、またそれ以外の時もそうですが、自分の心を正確に探ることだと教えます。なぜ主が悲しまれる罪を持っていながら、私は主を愛していますと偽ることができるのか。偽善者として歩み続けること、一体そこに

どんな祝福があります？宗教的なユダヤ教徒たちはそんなふうに住きたのです。悲しいことに彼らはそのことによって救いを得ることはなかった。ですからパウロはもしあなたの心が正しくなければ、あなたは神に対して罪を犯すことになる。

## 2) 主に対してふさわしくあるために 28節

そこでこう言うのです。28節「ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。」と。主に対してふさわしくあるようにと。そのためには自分を「吟味」することが必要だと。これも現在形の命令です。これは「試す」とか「試験する」という意味です。自分の心を試験するのです。本当に自分の心の動機が正しいのかどうか。またこのことには「価値があると認める」という意味があります。本当に神の前に立つに価値ある者かどうかが、このような心で神の前に立っているのかどうか。ひとりひとりが自分の心を吟味しなければいけない。そうすると、これまでの集会への参加とかなり変わってくるかもしれません。参加することが目的ではないのです。主をあがめることが目的なのです。主の杯やパンにあずかることが目的ではないのです。主の恵みに感謝することが目的なのです。ですから、主が命じておられることを行うことによって、我々が自分に問わなければいけないのは、本当に神が喜んでくださっているのかどうかです。自分はこれだけのことをしているのだから、きっと神様は喜んでおられるに違いないと言うかもしれません。問題はあなたがどう思うかではない。人がどう言うかでもない。神がどう言われるかです。「自分を吟味」しなさい、それがこの聖餐式にあずかる主をあがめる時に最も必要なことだと。

## 3) 主に対してふさわしくあることの大切さ 29-32節

### (1) さばきの約束 29節

それを話した後で29節「みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこととなります。」と、大変厳しい警告がここに出ています。正しい態度で聖餐式に臨まないなら、主に対して罪を犯すと。そして、さばきの対象になるということです。日本語ではあえて「みからだ」と訳していますが、ここで言われているのは人間のからだではなく、主ご自身のからだのことです。ですからあえて新改訳の中では「みからだ」と訳しています。ギリシャ語の信頼できる写本の中には「主の」ということばを入れて、だれのからだのことかはっきり記してくれています。なぜならここでずっと語ってきたことはイエス様の十字架を覚える話でしょう？尊い犠牲を覚えるのです。ですから「みからだをわきまえないで」、そのみからだを正しく評価しないならばあなたは主に対して罪を犯すことになる。そして彼らは確かに聖餐式、「主の晩餐」を守っていました。愛餐をともにしていました。でもいつの間にか目的が全くずれてしまった。パウロが言いたいのは、あなたたちが取っているパンと杯は普通のパンと杯ではない。ですから、主の「みからだをわきまえないで」、一体あなたが何をしているのか、そのことを正しく評価しないのでは、正しく判断しないのでは、「その飲み食いが自分をさばくこととなります」、あなた自身にさばきを招くことになるのだと教えます。

29節以降「さばく」ということばが繰り返されます。これは永遠のさばきの話ではありません。なぜかというと、救いにあずかり罪の赦しをいただいた人は二度と罪のさばきを受けることがないからです。ではこのさばきとは何かというと、これは主の懲らしめ話です。パウロが言うのは、もしあなたが参加しているからそれでいいではないか、確かに心に罪があるし罪を犯しているけれども、誰も知らないからいいじゃないか、そのようなふさわしくない態度で聖餐式に臨んでいるとしたら、あなたはさばきを、懲らしめを受けることになる。

### (2) さばきの実際 30-31節

30節「そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。」、ここに三つのことが記されています。

#### ・「弱い者」

これは非常に病弱な人の話です。からだ弱い人のことです。

#### ・「病人」

病気を患うことです。

#### ・「死んだ人」

この「死んだ」というのは眠ったということです。永遠の滅びに至ったということではなく、肉体的な死を言っています。クリスチャンが、また人が死んだ時に、それを眠ると言うのは、眠ったら必ず起き上がる、目覚めるからです。ある人は目覚めて神の栄光の中に、ある者は目覚めて神のさばきのところに立つのです。

あなたが神の前に心を閉ざして、神が憎んでおられる罪を平気で言い続けて歩んでいるのだったら、神はあなたに懲らしめを与える。神様はあなたが正しい道を歩むように、罪から離れて神が喜ばれる歩みをするようにまさにスパンキングを与える。その結果、あなたは非常に病弱になるかもしれないし、

病を患うかもしれないし、肉体的な死を経験するかもしれない。見ていただくと、「死んだ者が大ぜいいます」とあります。「弱い者や病人が多くなり」、ひとりやふたりではない、そういう人がたくさんいるという話です。勘違いしてはならないのは、病気がすべて罪の結果だと言っているではありません。イエス様を信じて神様に従っているはずのあなたが神に逆らい続けているならば、こういったことがあなた自身の身に訪れると。恐らくその人は自分に神様の懲らしめが届いていることをよくわかっているはずです。そして主は31節「しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。」とお話になって、自分を吟味することの大切さを改めて話すのです。「私たちが自分をさばくなら」、自分を正しく評価するなら、自分を正しく批判するならと。自分を吟味した上で神の前に正しく歩み続けていこうとするならば、自分の罪を告白して主の前を正しく歩んでいこうとするならば、そういう人にはさばきがないのだと言います。なぜなら神の前を正しく歩んでいるのだったらその人は懲らしめられる必要性はないからです。

### (3) さばきの種類 32節

32節を見るとこう続きます。「しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。」と、さばきということばが出ています。まず、「しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって」と先ほど説明したように、クリスチャンたちが経験するさばきについてパウロは説明しています。この「懲らしめられる」というのは「子どもが訓練される」とか「いろいろな災難が与えられることによって懲らしめられる」という意味を持っています。ですから、その人を愛する神様がその人の信仰の成長のために、その人が主のみこころに沿って正しく歩むために、その人が歩んでいる間違っただから正しい道に戻すために、神がこのようなことをなしてくれる。その神のみわざがこの懲らしめだということなのです。

そして「それは」という接続詞が出ています。この後を見ると、「私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです」と続きます。ここでは二つのさばきを比較するのです。最初のさばきはクリスチャンたちが受けるさばき、ここにある「懲らしめ」の話です。後半に「世とともに罪に定められること」と出てきます。この「罪に定められる」というのは、有罪の判決が下されるとか、罪の宣告がされるということで永遠のさばきの話です。ですからさばきと言っても、このように罪赦された者たちに対するさばきと赦されていない者たちに対するさばきの二つがあると教えます。だからクリスチャンであるあなたは永遠のさばきを恐れながら生きるのではないのです。それはあなたからもう完全に除かれたのです。でもあなたが間違っただ道を歩んでいると、神は懲らしめを与える。それはあなたを愛しているからです。でも愛している神を憎んでいる人々には、その人たちにふさわしい神様のさばきが、つまり永遠のさばきが下るのです。

### D. 愛餐についての結論 33-34節

33-34節「ですから、兄弟たち。食事に集まるときは、互いに待ち合わせなさい。空腹な人は家で食べなさい。」と最後に結論として記されています。というのはパウロはこの「主の晩餐」について話をしてきたからです。最初のことを思い出してください。彼らは愛餐をともにしたのでしょう？それについて「ですから、兄弟たち。食事に集まるとき」、それを目的に集まっている人々がいたからです。それが問題だったのです。そこでパウロはもしあなたたちがそれを目的に集まるのだったら、「互いに待ち合わせなさい」と言うのです。なぜこんなことを言ったかということ、21節にこの人たちは「食事のとき、めいめい我先にと自分の食事を済ませる」と書いてあります。みんな集まったら待とうとしないで我先に食事を口にしていたのです。だから、もしあなたたちがそれを目的に集まるのだったら、待ってあげなさいとパウロは言うのです。

そして、こう続きます。もしあなたたちが食事を食べるために集まるのであるならば、この「空腹な人は」というのは、まさにお腹が空いている人です。彼らはお腹が空いているから早く行ってそこで食べたいとします。そういう人々に対してパウロは「家で食べなさい」と言います。あなたたちが集まる時、食事が目的ではないからです。それをパウロはずっと教え続けているのです。でもこの人たちはそういう目的で集まっていた。もしあなたたちが空腹で、早く行ってそこで食べたいと思うのなら、家で食事をしてから集まって来なさいと。なぜなら教会というのはそれが目的ではないからです。なぜパウロがこんなことを言ったかということ、「さばきを受けることにならないため」にです。そのことを既にパウロはもうずっと語ってきたのです。あなたたちがさばかれないうために正しい動機を持って集まるようにと教えています。

最後に「その他のことについては、私が行ったときに決めましょう。」と言います。恐らくパウロ自身「主の晩餐」についてほかにも記したいことがあったのでしょう。でもパウロは今記したこと以外についてはそっちに行った時に直接あなたたちと話しましょうと。今、あなたたちが知るべきことについてはここに記しておいたと。こうしてこの「主の晩餐」についての教えを閉じるのです。

## まとめ

パウロは何を彼らに教えたかったのか——。既に見てきたように、何をするにしても私たちが覚えなければいけないのは、どんな心でそれをしているかです。私たちのしていることを神様は喜んでくださっているのかです。私の心のすべてをご覧になっておられる神様、この方に喜んでもらいたいと思っ

ているのに、本当にこの方は喜んでくださっているのかどうかです。それとも自分のしていることに自分自身満足を得ていませんか？神が満足されるかどうかです。あなたがどんなに喜んでしようと、神が喜んでいなかったらそれは空しいものです。何をするにも自分の心を吟味しなさいと。こうして教会に集まる時もそうでない時も、我々はすべて自分の心を吟味して、そしてそのすべてをご覧になっておられる神様が喜ばれることを願いながら、すべてのことを行っていきなさいと。どうかそのことをご自分の心にしっかり刻んで、いつもみずからの心を吟味して、人を吟味するよりも自分を吟味して、主が喜んでくださる歩みを継続して続けてください。それが私たちがこの救いにあずかった、またこの救いにあずかせていただいた目的だからです。